九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

受動的再帰構文と属性叙述

井口，容子
広島大学大学院総合科学研究科 ： 教授

https://doi.org/10.15017/2556307

出版情報：Stella. 38, pp.117-125, 2019-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

受動的再帰構文と属性叙述

井　口　容　子

1．はじめに

受動的再帰構文は，主語の属性を記述する文であると言われる。

（1）a．Cette chemise se lave facilement.

b．Le vin blanc se boit frais.

（1a），（1b）ともに主語である「このシャツ」，「白ワイン」の一般的な属性について語るものである。このことは「être + 過去分詞」の形の迂言的受動文とは異なり，受動的再帰構文が特定の時，特定の人物によって行われた行為を表すことができないという制約とも結びついている。以下の（2a-b）は，この制約を示すものである。

（2）a．*Ces lunettes se sont nettoyées hier à huit heures et quart.

（Ruwet 1972 : 95）

b．*Cette chemise s'est lavée par Paul.

つまり受動的再帰構文は特定の時空間において起こった出来事を記述する文ではなく，総称文であるということができる。

受動的再帰構文の大部分が総称的な性格を持つ，ということについては異論はない。ただ，ひとつここで問題としたいのは，常に「主語の属性」を述べるものであるのか，という点である。本稿においては「主題」の概念とも絡めながら，この問題を考察してゆく。

他方においてフランス語の受動的再帰構文をめぐっては，いわゆる中間構文に相当するタイプと，それとは異なる性質のものを区別する分析が近年出されている（Fellbaum and Zribi-Hertz（1989），Yamada（2002, 2009），林（2004）等）。筆者も井口（2004，2005，2007）等において，「中間構文型」と「未完了受動型」の２つの区別を設けることを提案した[1)]。本稿においても基本的にこの立場に立って分析を進めてゆく。フランス語の受動的再帰構文の分析を通して「総称性」，「叙述の類型」，「主題」について考察していきたい。

2．何が一般化されているのか

2.1. 未完了受動型と「主語の属性」

いわゆる「中間構文」が主語名詞句の属性を記述するものであるという主張は多くの先行研究において見られる。代表的なものは Van Oosten（1977）の「責任性」の議論であろう。「中間構文型」については次の 2.2. 節で検討することにして，ここではまずいくつもの点でそれとは異なるふるまいを示す，「未完了受動型」について考えてみよう。

（3）Le vin blanc se boit frais.

（3）は，ここで未完了受動型と呼んでいる受動的再帰構文の代表的なものであるが，これに後続する節として，Yamada は（4a）は可能であるが，（4b）は容認されないとする。

（4）a．Le vin blanc se boit frais, car son goût est meilleur dans ces conditions.
　　b．Le vin blanc se boit frais, #car il fait tellement chaud aujourd'hui.
　　（Yamada 2009：5）

主語の属性に言及する（4a）は許容される。これに対し，主語の属性ではなく，「外的な状況 situation extérieur」である気温を，「冷やして飲まれる」ことの理由として言及する（4b）は許容されない。このような事実から Yamada（2009）は，非中間構文型の受動的再帰構文においても[2)]，中間構文型の場合と同様，「主語の属性」が大きな意味を持つとしている（p. 10）。

だが総称的な意味を持つ未完了受動型の中には，後続する理由節において「主語の属性」ではなく，「外的な状況」への言及が可能なものもあるのではないか。このような疑問を抱いた筆者は，以下の例文を作ってインフォーマントに示してみた。

（5）Ici, les légumes se conservent dans le frigo, car il fait très chaud et humide.

この作例を，3人のインフォーマントはいずれも問題ないと判断した。前半部分の理由として後半の節で述べられているのは，「主語の属性」ではなく，外的状況である。

（4b）と（5）の違いは次のことから来ている。（5）は（4）とは異なり，主語である les légumes ではなくて，ici を一般化したものなのである。これは Krifka et al.（1995）で論じられている（6）のような文を思い起こさせる。

（6）Typhoons arise in this part of the Pacific.

1．Typhoons in general have a common origin in this part of the Pacific.

2．There arise typhoons in this part of the Pacific.

（Krifka et al. 1995：24）

（6）には下に表示されている2つの解釈が可能である。すなわち「1．台風（というもの）は一般に太平洋のこのあたりを源としている」,「2．太平洋のこのあたりでは台風が発生する」，というものである。1．は「台風」を一般化したもの，2．は «this part of the Pacific» を一般化したものである。Krifka et al. は2つの解釈のうち，より自然なのは2．の解釈の方であるとしている（p. 24）。

フランス語の再帰構文である（5）に戻ると，この文では主語ではなく，副詞的要素の ici が一般化されているという点において，2．の解釈の場合の（6）に近い。

「属性」ということを持ち出すならば,（5）の後半で述べているのは ici（ここ，この場所）の属性であるといえるだろう。ici で表された地方は，高温多湿という属性を持っているのである。

（4b）が容認されないのは，主語の le vin blanc 以外に一般化される要素がないことに加えて，後半の節に aujourd'hui があり，特定の日時の状況であることが，前半で述べられている総称性と矛盾するからであろう。

2.2.「中間構文型」の受動的再帰構文の場合

それでは「中間構文型」の場合はどうか。前節でも述べたように，いわゆる「中間構文」が主語名詞句の属性と密接なかかわりを持つとする主張は多くの先行研究において見られる。

Yamada（2009）は以下のコントラストを示す。

（7）a．Cette voiture se gare facilement, car elle est équipée d'un appareil de guidage.

b．Cette voiture se gare facilement, #car le parking est grand.

（以上，Yamada 2009：5）

予想にたがわず，主語名詞句である cette voiture の属性を理由とする（7a）は許容されるが，それ以外の理由を表す節を後続させる（7b）は許容されない。

だが，中間構文が含意するモダリティとされている「可能」の解釈を持つ場

合にも，主語以外の名詞句の属性を述べる受動的再帰構文があるのではないか。そう考え筆者は，Yamada の例文（7 b）の主語を les voitures に変え，さらに dans ce parking を加えるなど手を加えて（8）の文を作り，インフォーマントに示した。3 人のインフォーマントの評価はいずれも「可」であった。

（8）*Les voitures* se garent facilement *dans ce parking*, parce qu'il est très grand.

（8）は「この駐車場では簡単に駐車できる。なぜならとても広いから」という意味になる。（7）と（8）で大きく異なるのは，（8）では一般化されているのは主語の「車」ではなく，副詞的要素である前置詞句の中の名詞句，ce parking（この駐車場）である，という点である。つまり未完了受動型の（5）においてみられたのと同じ状況が，中間構文型の（8）においてもみとめられる。

ここで 2 つの問題が生じる。ひとつは（8）を「中間構文」と見なすことができるのか，ということ。もうひとつは，この（8）や 2.1. 節でみた（5）のような文を「属性叙述文」と考えることができるのか，ということである。

第 1 の問題にかんしては，「中間構文」とは何かという定義の問題になってくる。たとえば Lekakou（2005）は，「中間構文」を主語の属性を記述するものに限定する。その立場からすれば（8）は中間構文とはいえないことになるだろう。この問題は非常に興味深いものではあるが，本稿の中心的課題とは直接的な関係を持たないため，別の機会に論じることとする。なお本稿においては，説明の簡素化の観点から，（8）のような受動的再帰構文は「中間構文型」と呼ぶ。

これに対して第 2 の問題は本稿の考察の中心をなすものであるので，3 節以降で詳述してゆく。

3．属性叙述と「主題」

叙述の類型は，「主題」と密接なかかわりを持つものである。本節においては 2 つの先行研究を参照しながら，「主題」についてあらためて考えてみたい。

3.1. 春木（1983）の「テーム」

春木（1983）は「テーム thème」という概念を立てる。テームとは，「発話において prédication の枠組を与える要素，もしくはその領域を限定する要素」

(p. 23) である。そして下位カテゴリーとして，いわゆる「主題 topique」に相当する ce dont l'énoncé dit quelque chose のほかに，localisateur spatio-temporel を有する。いずれか一方のみをテームとして持つ文もあれば，テームが２つの連辞（syntagme）から構成されていて，２つの下位カテゴリーの各々に対応している場合もある。

（９）a. *Les jeunes*, ça n'a plus la notion de l'exactitude.
　　b. *En France*, on doit conduire à droite.
　　c. *Hier matin mon père* a failli se faire renverser par une voiture.
　　（以上，春木 1983 : 23）

（９）の各文においてイタリックの部分がテームであるが，(9a) の les jeunes は ce dont l'énoncé dit quelque chose，(9b) の En France は localisateur spatial ということになる。そして (9c) のテームは２つの連辞から構成されており，mon père が ce dont l'énoncé dit quelque chose，hier matin が localisateur temporel ということになる。そしていずれの下位カテゴリーの場合も，discours の流れの中においては，発話を定位するための déictique discursif としての機能を持ち，他方において文内部においては，prédication に対して枠組みを与え，その領域を限定する（春木 1983 : 23）。

3.2. 益岡（2004）の文内主題 / 談話テクスト主題

益岡（2004）は「叙述の類型」に関連させて，「主題」を「文内主題」と「談話・テクスト主題」に分類している（pp. 4-6）。「文内主題」は「属性叙述文」に見られるもので，次の（10）における「太郎は」がそれにあたる。

(10) 太郎は優しい。
　　（益岡 2004 : 4）

益岡によると，「属性叙述文」は「対象を表す部分」と「属性を表す部分」の２つから構成されており，この２つの成分は相互依存の関係で結合している。そして対象表示成分は「主題 topic」として表され，属性表示成分がそれに対する「解説 comment」として表されることになる（益岡 2004 : 4）。「文内主題」は，このような属性叙述文の文構造に根差した「文の内部的な事情により与えられている」（益岡 2004 : 5）主題である。

これに対して，「談話・テクスト主題」はそのような「文の内部的動機によっ

て」与えられるものではなく,「文外部の事情により，言わば派生的に」付与されるものである。「文外部の事情」とは，談話・テクストからの要請である（*ibid.*）。次の（11）に見られるように，事象叙述文が有題文の形をとる場合の主題は「談話・テクスト主題」である。

(11) 子供は笑った。

（益岡 2004：5）

「文内主題」は文内部の構造的要因により与えられるもので，益岡が提唱する「叙述の類型」における「属性叙述文」の，まさに定義にかかわってくるものである。これに対して「談話・テクスト主題」は，談話の中で「外的に」要請されるものである。したがって（11）のような「事象叙述文」の主語が，この機能を担うこともあるのである。

ここまで春木（1983），益岡（2004）という２つの先行研究を見てきた。両者に共通するのは，ともすれば「主題」という語で一括りに扱われてしまいがちな概念に，いくつかの下位カテゴリーや異なる機能を設ける必要があることを指摘している点である。次節においてはこれらを考慮に入れながら，フランス語の受動的再帰構文の問題について考察してゆく。

４．受動的再帰構文における副詞的要素

２節においては，（５），（８）のような再帰構文（以下に（12），（13）として再掲）を「属性叙述文」と見なすことができるのか，ということを問題にしてきた。

(12) *Ici*, les légumes se conservent dans le frigo, car il fait très chaud et humide.（=（５））

(13) Les voitures se garent facilement *dans ce parking*, parce qu'il est très grand.（=（８））

これらの文はイタリックで示した副詞的要素を持ち，その中に含まれる entity（「この地域」,「この駐車場」）を一般化した総称文，ということができる。

ところで Kageyama（2006）は，例文（14）のようなスペイン語やトルコ語等において見られる非人称再帰構文について，これらは副詞的要素を含み，文はそれに対する characterizing predication を行うものとしている（pp. 105-

106)。つまりこれらを「属性叙述文」と見なしている。

(14) Aquí se duerme muy bien en verano.［スペイン語］

'Here one can sleep very well in summer.'

(Kageyama 2006 :106)

(14) が「属性叙述文」と見なされるのなら，やはり副詞的要素を一般化している (12)，(13) も同様である可能性がある。ただ，(14) が非人称構文であるのに対して，(12)，(13) においては，主語位置を語彙的な名詞句 (les légumes, les voitures) が占めている，という相違はある。

ここで少し視点を変えて，以下のような受動的再帰構文を考えてみよう。

(15) a. Les livres se vendent bien cette année.

(山田 1997)

b. Le noir se portait beaucoup cet hiver.

(Wagner et Pinchon 1962)

(15 a-b) の受動的再帰構文は，時間的限定を伴っているが，時間軸上の特定の時点において行われた出来事を記述するものではない。ある期間において認められる複数の事象を一般化したものである。(15 b) は過去における事象の一般化であり，動詞の形態は半過去になっている。山田 (1997) は (15 b) について，「属性ではなく出来事に関する解釈を受ける」(p. 116) としている。

ただ (15 b) については，たとえばここ数年のファッションの潮流が話題になっていて，「この冬がどんな季節であったかといえば，それは黒がよく着られた季節であった (この冬は黒がよく着られた)」という解釈も，文脈により可能である。その場合は，先に見た (12)，(13) と同様，副詞的要素に対して特徴付けを行う属性叙述文，ということになる。(15 b) においては，「副詞的要素」がたまたま時を表すものであるにすぎない。この場合 cet hiver (この冬) は，益岡 (2004) のいう「文内主題」に相当すると思われる。

もちろん，このような属性叙述的解釈が常に生じるわけではない。たとえば「最近は暗い色調の服が流行るよね。そういえばこの冬は黒がよく着られたね」というような文脈で発話されたのであれば，「この冬」の属性を述べる文とは考えにくい。談話の中で「この冬」のことが話題になっているわけでもないのだから，「談話・テクスト主題」でもない。cet hiver は春木 (1983) の言う «localisateur temporel» であると思われる。それについて何かが語られるべき

トピックではなく，発話を安定させるために時空間におろされる錨のようなものではないか。

同様に，(15 a) の cette année も，特別な文脈がない限り localisateur temporel であると思われる。この (15 a) も，後者の解釈における (15 b) も「総称文」ではある。「今年」なり，「この冬」なり，事態が成り立つ期間が限定されているが，その時間的枠組みにおいて一般化された事象である。しかしながら「属性叙述文」ではない。

6．結　語

フランス語の受動的再帰構文は従来，主語の属性を述べるものであるとされてきた。だが受動的再帰構文の中には，「主語」ではなく，他の構成素，より具体的には副詞的要素を一般化した総称文も見られる。さらには，(15 a) の cette année のように，文中に含まれる副詞的要素ではあるが，いわゆる topic とは考えにくく，春木 (1983) のいう localisateur spatio-temporel と見なすべきものもある。このような文は，「総称文」ではあるが，「属性叙述文」と見なすことはできない。

「総称性」，「属性叙述」，「主題」という概念は，互いに関連を持ちながら，独自の領域を持つ概念である。フランス語の受動的再帰構文は，これらが絡み合う非常に興味深い構文であるといえる。

註

1）これに対して，春木仁孝氏は，この区別を設けない立場をとる（春木 2009，2010 等）。

2）山田博志氏も，山田 (1997)，Yamada (2002, 2009) と一貫して，フランス語の受動的再帰構文に，中間構文型と非中間構文型の 2 つを区別している。

参考文献：

Fellbaum, C. & A. Zribi-Hertz (1989) : *The Middle Construction in French and English : A Comparative Study of its Syntax and Semantics*, Bloomington, Indiana University Linguistics Club Publications.

春木仁孝 (1983)：「フランス語の非人称構文――副詞的要素の機能と énonciation ――」，

『フランス語学研究』17（日本フランス語学研究会），18–35.
春木仁孝（2009）：「フランス語の再帰構文受動用法の一体性について――モダリティーの観点から――」，『言語文化研究』35（大阪大学言語文化部），119–140.
春木仁孝（2010）：「現代フランス語の再帰構文受動用法――副詞的要素・潜在動作主と意味解釈――」，『言語文化研究』36（大阪大学言語文化部），125–145.
林博司（2004）：「フランス語の中間構文と代名動詞構文」『日本語の分析と言語類型――柴谷方良教授還暦記念論文集――』，くろしお出版，337–356.
井口容子（2004）：「受動的代名動詞のモダリティーと中相範疇機能拡張のメカニズム」，『ステラ』23（九州大学フランス語フランス文学研究会），1–17.
井口容子（2005）：「受動的代名動詞再考――叙述の類型とアスペクト――」，『フランス文学』25（日本フランス語フランス文学会中国四国支部），1–11.
井口容子（2007）：「代名動詞の意味・機能的ネットワーク――自発，受動，非人称――」，『フランス語学研究』41（日本フランス語学会），31–44.
Kageyama, T.（2006）：«Property Description as a Voice Phenomenon», Tsunoda, T. & T. Kageyama（eds），*Voice and Grammatical Relations*, Amsterdam, John Benjamins, 85–114.
Krifka et al.（1995）: «Genericity : An Introduction», Carlson, G. N. & F. J. Pelletier（eds），*The Generic Book*, 1–124.
Lekakou, M.（2005）: *In the Middle, Somewhat Elevated: The Semantics of Middles and its Crosslinguistic Realization*, Ph.D. dissertation, University College London.
益岡隆志（2004）：「日本語の主題――叙述の類型の観点から――」，益岡隆志（編）『主題の対照』，くろしお出版，3–17.
Ruwet, N.（1972）: *Théorie syntaxique et syntaxe du français*, Paris, Éd. du Seuil.
Van Oosten, J.（1977）: «Subjects and Agenthood in English», *Papers from the 13th Regional Meeting*, Chicago Linguistic Society, 459–471.
Wagner, R.-L. & J. Pinchon（1962）: *Grammaire du français classique et moderne*, Paris, Hachette.
山田博志（1997）：「中間構文について――フランス語を中心に――」，筑波大学言語学研究会『ヴォイスに関する比較言語学的研究』三修社，97–131.
Yamada, H.（2002）: «Sur les deux types de la construction du verbe pronominal passif — la valeur normative et la construction sur les éléments adverbiaux —», *Études de Langue et Littérature françaises*, 80, 208–221.
Yamada, H.（2009）: «Sur la valeur modale de la construction du verbe pronominal passif», *Études de Langue et Littérature françaises*, 95, 1–14.